

擬音語・擬態語に関する日英対照研究

—Beatrix Potter 「The Tale of Peter Rabbit」他とその日本語訳を観察対象として

西村 香奈絵

要旨

日本語の擬音・擬態語は、表現数、出現数が他言語と比べて多く、創造性・生産性も高いと言われている。本稿では、擬音・擬態語が使用されやすいと言われている児童文学に分類される Beatrix Potter の「The Tale of Peter Rabbit」等三つの物語とその日本語訳を取り上げ、それぞれで用いられる擬音・擬態語を抜き出し、その使用や表現方法を比較、検討した。英語原版では日本語より擬音・擬態語の表現数や出現数は少なかったが、日本語にはない動詞語彙の意味の違いや文法的手段による表現の工夫が観察された。また、英語原版で用いられた擬音・擬態語は、語源がほとんど動詞であり、上古の時代より音や様態などを表す語として副詞的に用いられてきた日本語の擬音・擬態語とは対照をなすことが明らかになった。

1 はじめに

日本語は、英語等の欧米諸国の言語と比較して擬音語・擬態語表現が豊かであると言われる。擬音語とは、「ワンワン」といった動物の声や「ザーザー」という雨音など、具体的な事物のたてる音を、言語話者である人間がその言語の音韻体系に基づき、音声象徴を利用して模倣したものである。擬態語とは、音を生じない感情や感覚、様相などを、当該言語話者に共有されている音声象徴を利用して言語化したものであり、「にこにこ（笑う）」や「こうこうと（明かりが焚かれている）」等が例として挙げられる。

日本語の擬音・擬態語は、他言語と比して数が格段に多く、創造性・生産性も高いと言われているが、厳密にはどのくらい他言語より多いのか、どのくらい創造性が高いのかは容易には判断できない問題である。本稿では、擬音・擬態語が使用されやすいと言われている児童文学において、日本語と英語がどのように擬音・擬態語による描写を行うのかを比較し、使用数の比較だけでなく、両言語にどのような特徴が見られるのか考察したい。観察対象としては、Beatrix Potter の「The Tale of Peter Rabbit」、「The Tale of Benjamin Bunny」、「The Tale of Squirrel Nutkin」の三つの物語とそれぞれの日本語訳を用いて、それぞれの言語で用いられる擬音・擬態表現を抜き出して、その使用や表現方法を比較する。

具体的には、(1)日本語と英語の擬音・擬態語表現の語数及び使用頻度の比較、(2)日本語の擬音・擬態語表現と対応して用いられる英語の表現方法、及び(3)日本語と英語の擬音・擬態語の語源の違いについて調査を行った。その結果、(1)に関しては、先行文献等で述べられているほどの差は見られなかったが、いずれも日本語の方が英語よりも多いことが分かった。次に、(2)に関しては、擬音・擬態語の表現数のより少ない英語では、その欠如を豊富な動詞語彙の意味の違いによって埋め合わせることがしばしば言われるが、その傾向は本研究においても確かめられた。さらに、英語の擬音・擬態語表現は、日本語のように音や様態などを表す語として用いられるよりも、それを動詞や名詞等に派生させた語彙が用いられるのが主流であるという先行研究での主張(寛 2008)も確認された。ただし、(3)において、英語原版に出現する擬音・擬態語の語源を調べると、その大半(13表現中 10 表現)は動詞が起源であることが分かった。これは、日本語では音や様態などを表す副詞的に表す用法が起源であるのとは大きな違いである。もし、英語の擬音・擬態語の語源の多くが動詞であるということが一般的に当てはまるとすると、日本語と英語の擬音・擬態語表現では「派生語の使用に違いが見られる」という先行研究で得られている結論の前提が覆ることになる。なぜなら、「派生語」として分類されていた英語の擬音・擬態語の動詞語彙が、派生語ではなく本来的な使用法であることになり、日本語において擬音・擬態語が派生的に動詞として用いられるのとは単純な比較ができなくなるからである。

2 先行研究：日本語と英語の違い

2.1 語彙数

日本語における擬音・擬態語の種類は他言語と比べて群を抜いて多いと言われており、これが日本語の持つ大きな特徴の一つであると考えられている。擬音語・擬態語は、どの言語においても観察されるが、欧米においては子供っぽい表現であると考えられ、大人の言語使用の場には頻繁には用いられない。日本語においても、擬音・擬態語は児童文学に多く用いられ(3000字テキストに擬音・擬声語の現れる頻度 13.11/1000字)、中高生向け小説(1.67/1000字)、一般的な小説(1.39/1000字)と対象読者年齢が上がるに従って使用頻度は減り、学術書ではほぼ見られない(0/1000字)との研究報告がある(スコウラップ 2011)。しかし、日本語では大人同士の会話であっても擬音・擬態語表現を頻繁に使用するなど、日常の言語活動に欠かせない要素となっている。

その使用頻度を反映するように、日本語は英語よりも擬音・擬態語数が多いと言われる。例えば村田(2011、1993)では、各種オノマトペ辞典に登録されているものを比較し、英語には約 1500 種あるのに対し、日本語には約 2500 種あると述べられている。小島(1984)は、英語が他の印欧語系の言語より擬声・擬音語が多いと述べた上で、それでも

英語で日常よく用いられる擬音語・擬態語としての語感の残っているもので200語程度であるが、日本語では1000語以上は存在すると述べており、日本語の擬音・擬態語は英語の5倍以上あるということになる。

しかし、擬音・擬態表現の正確な数を数え上げ比較することはほぼ不可能に思われる。第一に、小島(1984)が述べているように、通時的な変化の過程で、擬音・擬態語起源の語であっても、そのことが話者には感じられなくなっている場合があり、どの範囲の語までを擬音語・擬態語と数えるのかという基準は、曖昧なものにならざるを得ない。例えば、小島によると、「吹く」はもともとは「フーフー」という吹くときに生じる音から派生された語であるが、この時代に我々が「吹く」という語を使う場合には、擬音語との関連は想起しない。このような語を擬音・擬態語に入れるかについて明確な基準を定めることは、擬音・擬態語との連想可能性という主観的な判断に依存することになり、難しい。第二に、英語と日本語を比べる場合、両言語の構造が異なっているため、一方の言語の擬音・擬態語の統語範疇を基準として他方の言語内で語彙を探すということにも問題がある。例えば、日本語では擬音・擬態語は副詞としての機能を果たすものが多いが、英語の辞書では間投詞と分類されている。さらに、日本語は膠着語であり、格助詞等の語尾形態素を付加することで文法関係を示す言語では、英語のような屈折的性格を持つ言語と比して、擬音・擬態語の原型をとどめたまま語彙体系に取り入れることが容易である。英語の擬音・擬態語には、動詞や名詞としての使用を持つものも多く、日本語のように擬音・擬態語の語感を保つことが難しいことも考慮されるべきであろう。以上のようなことを考えると、英語と日本語の擬音・擬態語数の比較は難しく、可能であったとしても、表層的な側面をとらえるにとどまる恐れがある。本稿では、日本語と英語の擬音・擬態語数や頻度の比較に重点を置くのではなく、それぞれの言語が擬音・擬態語を用いて表現している事態を、一方の言語ではどのように表現しているのかという点により注目して分析する。

2.2 音象徴の体系性

擬音・擬態語数を比較することは困難であるとしても、名詞や形容詞・動詞など他の語彙にも広く浸透し、音象徴を利用した創造性も高いという点で、日本語は英語等と比較して、豊かな擬音・擬態語体系を持っている(筧壽雄、田守啓 2011、1993、pii)ということはあるかもしれない。また、擬音・擬態語は、音象徴を利用して構成されるものであるが、日本語ではその音象徴の体系が英語よりもしっかり構築されているということもできるかもしれない。

例えば、「バシヤバシヤ」上がる水しぶきよりも、濁音を用いた「バシヤバシヤ」上がる水しぶきの方が、跳ね上がる水の量は多く感じる。同様のことは「パリパリ」割れるよ

りも、「バリバリ」割れる方が大きな破片をより勢いよく砕ける様子を表すことや、「バシッ」と捕球するよりも「バシッ」と捕球する方がより速い球を痛みを感じるほどの勢いで受け止めた様子を表すことなどにおいても観察される。これは、「パ」と「バ」という音とそれに結び付けられる印象、意味が体系だった対の語群を形成することを意味する。さらに、同じことは「パ」と「バ」の対だけでなく、「ピ」と「ビ」（例「ピシッと打つ」と「ビシッと打つ」）、「サ」と「ザ」（例「サーッと雨が降る」と「ザーッと雨が降る」）等にも見られる。静音と濁音の対だけでなく、同じ語を重ねることで反復性を表すこと（例「ピカッと光る」と「ピカピカと光る」）や促音・撥音の挿入（例「ゴロ」「ゴロッ」「ゴロン」）など法則性を見出すことは容易である。このように音象徴が体系だっているという特徴と合わせて考えると、日本語の方に分があると思われる。

ただし、英語にも音象徴による意味の違いにも法則性を見出すことはできる。例えば、drip（ぼたぼた落ちる）< drop（ぼたぼた落ちる）や、clink（チャリン）< clang（ガチン）では、いずれも後者の方が大きいものを連想させるが、これは「大きさ」が母音の口の開きと関連していると考えられる（松田 2007, p.228）。しかし、日本語の擬音・擬態語ほどの体系性は持っていないと思われる。

2.3 擬音・擬態語の派生的使用

擬音・擬態語からの派生語の使用に関しては、日英語で違いがあることが笥（2008）で指摘されている。笥は、擬音・擬態語を語彙化レベルによって4つに区分し、日本語と英語での使用を比較した。程度（1）は臨時語で、話者により創造された語が分類され、程度（2）は、語彙化されたオノマトペ（擬音・擬態語）としての地位を保有しているが、引用形を伴うものが分類される。程度（3）は、より語彙化が進んだもので、語形変化がある。程度（4）は、語形変化を伴う点は程度（3）の語彙と同じであるが、引用形となることが通常はないであろうと思われる語が当てはまる。それぞれのレベルに分類される、笥の挙げる例は次のようなものである。

表1 日英語におけるオノマトペの語彙化程度

程度	1	2	3	4
日本語	どってこどってこ うるうる（山が盛り上がる）	ざあっ（と） パチパチ（と） わあわあ（と） すっかり	びっくりする	おどろく そそぐ
英語	tiddley-tum-tum	bow-wow puff(-puff)	crack chatter splash	sob sigh

笥（2008, p.40）

この4つの程度の中で、日本語の擬音・擬態語の使用では程度（2）が中心であるのに対し、英語では程度（3）が中心であると算は述べている。

ただし、レベル（3）や（4）の派生語の生産性においては英語よりも日本語の方が高いと思われる。日本語では、元となる擬音・擬態語に派生語尾を付加することにより、動詞や名詞等を派生させる。例えば、「ぞっと」に「する」を付加して「ぞっとする」という動詞、「ゆら」に「めく」を付加して「ゆらめく」という動詞、「ばさ」に「つく」を付加して「ばさつく」という動詞、さらに名詞化語尾「き」を付加して「ばさつき」という名詞が派生される。「めく」や「つく」を付加できる語はある程度限られるが、「する」あるいは「している」の適用可能な語は多い。もちろん、英語においても、擬音・擬態語が複数の品詞にまたがって用いられるということはある。例えば crash は、「ガシャン」という間投詞としての意味に加え、「すさまじい音をたてる」のような自動詞、「ぶち壊す」という他動詞、「墜落、衝突」という名詞、「すさまじい音響をたてて」という副詞の意味を持つ。しかし、このような派生的意味を持つ語は限られており、日本語のような体系的な生産性は見られない。

表1の算（2008）の分類表は、連続的なものであり、同じ語であっても使用法によっては程度（2）に分類されたり程度（3）に分類されたりすると述べられている。語彙の数を数えるだけでは得られない考察であり、本稿でも実例観察により算の考察がどのように当てはまるのか調べる。ただし程度（4）は、語彙化の程度が進んでおり、日本語母語話者の直観として擬音・擬態語との関連性を見出すのが困難なものが多く含まれ、擬音・擬態語としての分析は適切ではないように思われるため、本稿では数え上げの対象としない。一方、英語の sob や sigh には、間投詞として「グスン」、「フーッ」の意味があり、日本語の「おどろく」や「そそぐ」とは異なり、擬音・擬態語との関連性があると考えられる。本稿では、このように擬音・擬態の意味を持つ派生語は、程度（3）に含め考察を行う。

2.4 様態の違いを動詞の語彙の違いとして表す英語

英語は、日本語に比べて擬音・擬態語が少ないことがしばしば指摘されるが、英語はそれを動詞の語彙の豊富さによって埋め合わせると言われる（田守 2011, 1993, p.18）。例えば、田守（2011, 1993）は、動物の鳴き声を表すのに、英語では moo（もーと鳴く）、bleat（めーめー鳴く）、grunt（ぶーぶー鳴く）、quack（がーがー鳴く）、squeak（ちゅーちゅー鳴く）、gibber（きゃっきゃと鳴く）のように動詞の違いで表されるのに対し、日本語には動物の鳴き声に用いられる動詞は「鳴く」「いななく」「吠える」くらいしかなく、動物の違いによる区別は擬音語によって行われるという。他にも、「歩く」の様態の違いの表現（stroll「ゆったり歩く」、saunter「ぶらぶら歩く」、trudge「とぼとほ歩く」、tramp「どし

んどしんと歩く」、march「ゆうゆうと歩く」等) や、「話す」の様態の違いの表現 (chat「べちゃくちゃ話す」、drivel「だらだら話す」、whisper「ひそひそ話す」、gab「へらへら話す」等)、「煮る・ゆでる」の様態の違いの表現 (parboil「さっとゆでる」、poach「くつつくゆでる」、boil「ぐらぐら煮る」、simmer「ことこと煮る」、stew「とろとろ煮る」等) などでも同様のことが観察される。

しかし、スコウラップ (2011、1993) は、英語は指摘されるほど動詞の語彙が豊富ではなく、ものが擦れ合う音や跳ね散る音を表す場合、日本語には数十語の擬音・擬態語があるが、英語には「ほんの一握り」の動詞しか用いられないと述べている。『日本語使いさばき辞典』には、ものが擦れ合う音を表す擬音語・擬態語として、55語を見つけることができる¹。同様に、跳ね散る音に適応される擬音・擬態語には、16語を見つけることができる²。『日英擬音・擬態語活用辞典』によると、物が触れ合う音として見つけ出された日本語の55語に対応する英語は、27の動詞ないし名詞が見つけられる³。同じく、跳ね散る音として見つけ出された日本語の16語に対応するものとして、英語では6の動詞が見つけられた⁴。スコウラップの述べるように、日本語の擬音・擬態語で表現仕分ける違いの全てを、英語の動詞の種類の豊富さで補っているわけではなさそうである。この点についても、本稿の実例分析の観点として加える。

3 日本語と英語の違い

3.1 観察対象文献

スコウラップ (2011、1993) によると、大人の言語使用で擬音・擬態語の使用が稀である英語においても、大人の言語使用でも擬音・擬態語に使用が普通である日本語においても、児童文学における擬音・擬態語の使用は多い (13.11/1000字に対して、一般的な小説1.39/1000字)。できるだけ多くの擬音・擬態語の使用を効率的に比較するという目的のため、本研究においては児童文学を選び、Beatrix Potterによる「The Tale of Peter Rabbit」、「The Tale of Benjamin Bunny」、「The Tale of Squirrel Nutkin」の3作品 (3264語) を観察対象とした。いずれも『英語で楽しむピーターラビットの世界』(The Japan Times、2012) に日本語訳 (木谷朋子、監修河野芳英) が共に収録されている。日本語訳が付されていることで、分析者の先入観によらない対訳を、英語原版に対応する日本語の比較テキストとして用いることができる。

3.2 英語原版と日本語訳に見られる擬音・擬態語の比較

3.2.1 出現数の比較

英語原版および日本語訳に出現した擬音・擬態語の数を物語毎にそれぞれ示したものが

表 2、表 3 である。「臨時語」には、作者や訳者の創作によると思われる「擬音・擬態語」を、それ以外の項目には慣習的な使用であると思われるものを数えた。「擬音語」には物音や動物の音そのものを描写するものを、「擬態語」には様子を描写するものを、「擬音語派生語」には擬音語としての意味及び使用法を持つ語が、間投詞以外の品詞（名詞や動詞）で用いられているものを、「擬態語派生語」には擬態語としての意味及び使用法を持つ語が間投詞以外の品詞（名詞や動詞）で用いられているものを分類した。「臨時語」は 筧 (2008) の程度 (1)、「擬音語」及び「擬態語」は程度 (2)、「擬音語派生語」及び「擬態語派生語」は程度 (3) に対応する。筧は、sob や sigh のような「現実の音の表示からより遠く、より客観的に状況を記述する語」はコミックで用いられるような場合を除き、引用形にならないことから程度 (4) に分類されているが、擬音・擬態語としての意味や用例が『マンガで楽しむ英語擬音語辞典』に記載されているものについては、程度 (3) の「擬音語派生」ないし「擬態語派生」に含め分類した。

表 2 英語原版に出現した擬音・擬態語の数

	The Tale of Peter Rabbit	The Tale of Benjamin Bunny	The Tale of Squirrel Nutkin	計
総語数	951	1114	1199	3264
臨時語	3	1	2	6
擬音語	0	0	1	1
擬態語	0	0	0	0
擬音語派生	2	4	4	10
擬態語派生	2	0	2	4
計	7	5	9	21
1000 語中の頻度	7.4	4.5	7.5	6.4

表 3 日本語訳に出現した擬音・擬態語の数

	ピーターラビットの おはなし	ベンジャミン バニーのおはなし	りすのナトキンの おはなし	計
総語数	2840	3260	3543	9643
臨時語	0	0	2	2
擬音語	3	3	5	11
擬態語	6	4	7	17
擬音語派生	0	1	0	1
擬態語派生	1	2	1	4
計	10	10	15	35
1000 字中の頻度	3.5	3.1	4.2	3.6

全体としては、英語では派生語を含み擬音語・擬態語の出現回数は合計 21 回であるのに対し、日本語では 35 回であり 1.6 倍強日本語の方が出現回数が多いと言える。臨時語の使用は英語原版の方が多く、語彙化された「擬音語」「擬態語」では日本語が合計 28 回、英語が 1 回と、出現回数に大きな違いがある。しかし、それぞれの派生語では日本語が合計 5 回なのに対し、英語では 14 例と、日本語より 3 倍近く出現回数が多い。このことは筧 (2008) の観察と一致する。つまり、日本語では派生語よりも、擬音・擬態語そのものの使用が中心的であるのに対し、英語では派生語の使用が中心的であるということである。

擬音語・擬態語の出現回数が日本語の方が多く、英語の方が少ないということは、日本語で擬音・擬態語が使用されている箇所が英語では擬音語・擬態語を使用しない表現が用いられているということである。次節では、それが英語ではどのような表現方法が用いられているのかさらに詳細に観察する。

3.2.2 日本語の擬音語・擬態語と対応する英語の表現方法

英語と日本語それぞれの擬音・擬態語表現と、その対応関係を表すのが次の表である。同じ番号同士が対応関係にある。例えば、11e と 11j は、同じ内容を表す対応関係にあり、「e」は英語原版の方に、「j」は日本語訳に出現する表現であることを示す。1～12 の番号が「The Tale of Peter Rabbit」、13～24 が「The Tale of Benjamin Bunny」、25～44 が「The Tale of Squirrel Nutkin」から抜き出した表現である。

表 4 英語原版に出現した擬音・擬態語

英語 (7 例 ; 1～12) (5 例 ; 13～24) (9 例 ; 25～44)

臨時語 6 例	6e kertyschool	7e lippity lippity	10e scr-r-ritch, scrtch, scratch, scritch	
	14e the trit-tot, trit-trot		34e Hum-a-bum!buzz! Buzz! Hum-a-bum buzz!	
	44e Cuck-cuck-cuck-cur-r-r-cuck-k-kl			
擬音語 1 例	39e Squeak!			
擬態語 0 例				
擬音語派生 10 例	11e scutter (急いで逃げ込みました)	12e flop	19e cracking(割って)	21e sniff
	22e a pitter-patter, pitter-patter	23e scratching (むしりとって)	28e tickle (くすぐり)	35e roar (風のように現れた)
	36e whir(r)	40e scutter (走って)		
擬態語派生 4 例	1e squeeze (無理やりもぐり込みました)	4e pop	29e peep (のぞきながら)	
	41e peep (のぞいて)			

計 21 例

表 5 日本語訳に出現した擬音・擬態語

日本語 (10 例; 1~12) (10 例; 13~24) (15 例; 25~44)

臨時語 2 例	34j プンブン! プブン、プブンのブン!	44j 「クックー、クックー、クルルルー、クックック!	
擬音語 11 例	6j くしゅん	10j サクッ、サクッ、 サクッ、サク	12j バタリと横になる と
	21j クンクン (かぎま した)	22j ピタパタ、ピタパ タ (という足音)	36j ヒューヒュー (と 風のような音)
	38j 「ガザガサッ!」 (という争うような 音) (a scufflement, N)	39j 「きい〜きい〜!」 (という大きな鳴き 声)	43j バタバタ (と踏 み鳴らして) (stamp his feet, V)
擬態語 17 例	2j バツタリ (出くわ して) (whom should he meet but Mr. McGregor)	4j ポンとかおせよう と	5j プルプル (震えて) (tremble V)
	8j じっと (very very still, ADV)	9j ピクピク (動いて) (twitch, V)	15j びよんびよん (set off-with a hop, skip, jump, V)
	18j どんどん歩いて行 く (lead, V)	24j 悠然と歩きながら (march, V)	25j ピョンピョンとび 跳ねながら (bob up and down, V)
	27j ピョンピョンと踊 りだし (dance up and down, ADV)	30j ずっと (見張っ て) (watch, V)	31j びっしり刺して (full of, ADJ)
	42j じっと (still, ADV)		33j ペロペロ (lick, V)
擬音語 派生 1 例	17j ちょうど ⁵ (newly, ADV)		
擬態語 派生 4 例	3j びっくりして (in a great excitement, ADV)	13j ピクピクさせて (prick, V)	20j 目をばちくりさせ て挨拶 (wink, V)
			32j ベタベタしている (sticky, ADJ)

計 35 例

英語版において、擬音・擬態語として用いられる表現の種類は19種類（重複使用2回）、日本語は30種類（重複使用5回）であり、日本語の方が英語より1.5倍多い。表4、表5において、網掛けになっている表現が、もう一方の言語において対応する擬音・擬態語での表現がないもので、括弧内に対応する日本語ないし英語での表現を記した。

まず、表4を見ると、英語で擬音・擬態語が用いられている箇所において、日本語では擬音・擬態語とは関連性のない動詞、あるいは比喩表現や副詞との組み合わせによって表現されているものが合計9例（＝網掛け部分）あるが、いずれも英語は擬音・擬態語の派生語、特にその動詞が用いられている。

次に、表5を見ると、日本語で（派生語も含め）擬音・擬態語が用いられている箇所、英語では擬音・擬態語との関連性のない名詞、動詞、副詞（句）、形容詞が用いられているものは、合計23（＝網掛け部分）ある。日本語の擬音・擬態語表現の総数が35であるので、23という数は、総数全体の6割強（23/35）に上る。また、分類上では、擬音語で11例中3例、擬態語で17例中15例、擬音語派生で1例中1例、擬態語派生で4例中4例が英語で対応する擬音・擬態語表現が用いられていないことになる。内訳は、英語において、動詞によって擬音・擬態語のニュアンスが表わされているものは合計11例、副詞（句）によるものは5例、形容詞は4例、名詞は2例、その他（文法構造によるもの）は1例である。

つまり、日本語で擬音・擬態語によって表現し分けられるものが、英語ではその約半数が動詞によって表現し分けられていることになる。これは、日本語が擬音・擬態語を用いて動作の様態を表し分けるのに対して、英語では動詞の語彙の違いによって表し分けるという一般的傾向が、本調査においても認められたことを示す。このことは、英語では擬態語の例が一例もないのに対して、日本語では17例もあるという際立った対比とも関連すると思われる。擬態語は、動詞で表される動作や事態の様態を表し、動詞の意味の中に取り込みやすく、豊富な動詞語彙によって補いやすい。

ただし、英語で形容詞や副詞によって表されている日本語擬音・擬態語は、かなりの程度一般化しており、多くの場合において（例えば、「ちょうど」「びっくりして」「きちんと」等）、擬音・擬音的性質を日本語話者は意識していないのではないと思われる。

次に、英語では擬音・擬態語の派生語の使用が主流であることを示す点を指摘しておきたい。表4、表5において下線が引かれている例は、英語と日本語とで使用された表現の種類が異なることを表す。例えば、「12e flop」は英語では擬音語の派生語であるが、対応する日本語の表現「12j バタリと横になると」は、擬音語に当たる。他の例についても見てみると、全ての例において、英語では擬音語派生語あるいは擬態語派生語は、日本語では擬音語あるいは擬態語で表現されるというパターンが見られる。ここにおいても、日本

語では擬音・擬態語で表現されるものが、英語ではそれが動詞や名詞に派生した語によって表現される傾向があることが分かる。

一例のみ、語彙ではなく文法構造によって、日本語の擬音・擬態語表現の意味が表わされている箇所があった。2j である。以下に本文を示す。

- (1) But round the end of a cucumber frame, whom should he meet but Mr. McGregor!
 (2) けれど、キュウリの苗床の角を曲がったところで、なんとマックレガーさんとバツタリ出くわしてしまったのです！

英文の方では、仮定法により可能性の少なさと、疑問詞 whom の使用によってその強調と驚きが表わされている。仮定法のない日本語では、同様の手段で可能性の少なさを表現することはできないため、代わりに「バツタリ」という擬態語により表現されている。動詞 meet に対して単に「会う」ではなく、「出くわす」という偶然性を強調する複合動詞⁶（出る＋交わす（会わす））が語彙として選択されている。スコウラップ（2011）は、英語の動詞語彙の豊かさは、日本語の擬音・擬態語による表現をカバーしきれない点に強調したが、その一例がこれであると言えるであろう。日本語では擬態語（と複合動詞）により表現されるものが、英語では仮定法という文法構造によって表現される。

以上をまとめると、英語版よりも日本語訳の方が派生語も含めた擬音・擬態語の使用頻度は 1.6 倍強高く、使用される表現の種類も 1.5 倍多かった。英語における擬音・擬態語の使用は、擬音語・擬態語のまま用いるよりも、それを名詞や動詞等に派生させた語彙の形で行うのが主であることが分かった。特に、動詞語彙の意味の分化が、日本語の擬音・擬態語による表現力を充たす傾向が見られた。それに対して、日本語では派生語は英語ほど頻繁には用いられず、擬音・擬態語のまま用いられることが多い。

3.2.3 英語の擬音語・擬態語の語源

擬音・擬態語は、動物の声をはじめとする我々が耳にする音を表したり、感覚や感情、様態を表す語であり、日本語における擬音・擬態語は、現在使われている語彙とは異なる形で用いられてはいても、上古の時代より、主に副詞として世界の音や様態、人の感情を表すという使用方法に変化はない。（以下の引用箇所の強調は、引用文献のものである。）

- (3) 一つの鹿、み前に立ちき。鳴く声は^{とと}比々といひき（播磨国風土記、託賀郡）（鈴木 2014、p.587 より）
 (4) 吾妹子が袖も^{しほ}志保々に泣きしそ思はゆ（万葉集・4357）（鈴木 2014、p.587 より）

- (5) 風雑へ雨降る夜の…咳かひ鼻^{ヒシヒシ}咄々^{ヒシヒシ}にしかとあらぬ鬚かき撫でて (万葉集・892)
(鈴木 2014、p.587 より)

中古以降時代を下っても、その使用方法は変わらない。

- (6) このかぐや姫きと影になりぬ (竹取物語) (鈴木 2014、p.590 より)
(7) 女房の十廿人と出で居て、ほほと笑うぞや (栄花物語・月の宴) (鈴木 2014、p.590 より)
(8) や、あの斑ら牛は最前から某の顔をぢろりぢろりと見て、何ぢや、めー。今一つ酒をのめーという事か。(『狂言集』日本古典全書) (山口 2010、p.179 より)

つまり、日本語の擬音・擬態語は使用が見られる初期の時点から、典型的には「に」や「と」といった助詞を伴い、声や音、様態などを表現する副詞表現として使用されている。

ところが、英語の擬音・擬態語（臨時語を除く）は、今回の観察対象となったテキストでは、派生語を含め 13 表現が用いられていたが、動詞語源であるものが 10 表現あることがわかった。語源を調べるに当たっては、『Oxford Dictionary of English』、『ジーニアス英和辞典』、『新英和大辞典 第 6 版』を参照した。

表 6 英語原文に用いられた擬音・擬態語の起源

動詞 起源	擬音語起源	pop	tickle	roar	whir(r)	squeak
	擬態語起源	peep				
	擬音・擬態語以外の起源 ⁷	crack	scratch	squeeze		
名詞 起源	擬音語起源	a pitter-patter, pitter-patter	flop	sniff		
	擬態語起源					
	擬音・擬態語以外の起源					
	不明	scutter				

『Oxford Dictionary of English』（以降 ODE）によると、pop は、後期中英語の擬音語が起源で、a blow, knock（殴打）という名詞と to strike（打つ）という動詞の意味で用いられたのが起源とされている。tickle は、pat や touch（軽く触れる）を意味する tick に「-le」という動詞語尾が付加されたものである。tick は、『ODE』では擬音語起源とは書かれておらず、ゲルマン語起源であろうとしか述べられていないが、『ジーニアス英和』及び『新英和大辞典』には「軽く叩く音の擬音語」と記載があるため、擬音語起源として分類

した。roar、whir(r)、squeakは、それぞれ、古英語で「吠える(動詞)」、後期中英語で「ピューっと音をたてて動く(動詞)」、後期中英語で「キーキー鳴く(動詞)」の意味を持つ擬音語(imitative)が起源であるとされている。

一例ながら、擬態語起源のものにpeepがある。『ODE』では、起源は「symbolic」(象徴語)と記載されている。象徴語は、擬音語と擬態語を総称して用いることもあるが、『ODE』では、擬音語は「imitative」(擬音・擬声語)と記されており、「symbolic」はここでいう擬態語に相当すると思われる。『ジーニアス英和辞典』には、piken(そっとのぞく)の変形かと記載されている。

crackは、『ODE』、『ジーニアス英和辞典』、『新英和大辞典』によると、古英語で「爆発音をたてる」という動詞の意味で用いられており、ゲルマン語の動詞が起源である。同様にscratchは、共に「ひっかく」という意味を持つ方言の語彙scratとcratchの混成によるものであるという。squeezeは、語源は不詳であるが、古英語で「圧搾する」という意味のcwýsanが起源であると記されている(『ジーニアス英和辞典』)。

上記3辞書によると、a pitter-patter, pitter-patterは、後期中英語の名詞pat(平たいもので叩く)というおそらく擬音語起源の語が動詞としても使用されるようになり、反復を表す動詞語尾-erが不可され、さらにその反復形になっているということである。同様に、flopは、中英語でおそらく擬音語として用いられていたflappen(びしゃり、名詞)の異形であるという。sniffは、中英語における擬音語が起源であり、『新英和大辞典』によると1340年に名詞として用いられているという。

最後に、scutterは上記3辞書では語源は不詳とされている。『新英和大辞典』では、scuttle(急いで行く、急ぎ足)の変形かと書かれている⁸。scuttleの語源も特に記載されていない。

以上のように、今回分析対象としたテキストで用いられた英語の擬音・擬態語は、擬音語・擬態語が起源であるもの9例の内、6例が動詞を語源とし、擬音・擬態語以外が起源のものも含めた13例の内9例(69%)が動詞を語源とすることが分かった。これは、日本語の擬音・擬態語において、その使用が見られる当初より、現在と同様「に」や「と」を伴い副詞表現として用いられていることとは大きく異なる。日本語においては、擬音・擬態語は音や様態などを、音や様態そのものを表す語として始まったが、英語においては、多くの擬音・擬態語は音をたてる、その様態で行う、といった動作の一環として始まったということになる。

本研究では筧(2008)に基づき、動詞として用いられている擬音・擬態語を、派生語として分類し、日本語との比較を行い、筧と同様に、日本語とは異なり英語では派生語の使用が中心であるという観察結果を得た。しかし、英語においては大半の語の起源が動詞で

あることを考慮すれば、動詞としての使用は派生語ではないことになる。もし、この傾向が今回調査したものだけでなく、英語の擬音・擬態語全体について成り立つことであるならば、動詞の形で用いられた擬音・擬態語を、「擬音・擬態語の派生語」として分類した筈（2008）に基づく本研究における分類方法が適切ではなかったことになる。筈は、日本語の擬音・擬態語の有り様に基づき、音や様態を直接表現する使用法を基本形と設定し、名詞や動詞として用いられているものは、そこからの派生語であるという方向でレベル設定を行った。しかし、この方向性を前提とする分類表は、動詞起源ものが大半を占める今回の調査ではあてはめられないものであった。今後は、今回の研究で明らかになった擬音・擬態語の動詞起源の傾向が、英語の擬音・擬態語全体において見られるのかどうか調べる必要がある。

4 まとめ

本研究では、児童文学を選び分析対象としたが、日本語においては大人の言語使用においても擬音・擬態語が比較的多くみられるのが特徴であるので、より幅広いジャンルのテキストを分析する必要がある。そのことを念頭に置いた上で、本研究で分かったことは次の通りである。

今回分析対象としたテキストにおいては、擬音・擬態語の使用頻度は日本語の方が英語より約1.6倍高く、表現の種類は日本語の方が1.5倍多かった。しかし、英語と日本語では擬音・擬態語を用いる箇所の非重複率は、32例/44例（73%）で、擬音・擬態語を用いる箇所が日本語と英語では重なっていない部分が大半であった。従って、擬音・擬態語の使用頻度は確かに日本語の方が高く、使用語彙の幅も広いが、今回観察対象とした文献では、先行文献で言われているほどの差は見られなかった。ただし、スコウラップ（2011、1993）の結果（13.11/1000字）と比しても3.6字/1000字という今回見られた使用頻度は低く、英語の訳という特殊なテキストであったことが擬音・擬態語の使用頻度をやや抑える方向に働いたかもしれない。

また、英語では、日本語で擬音・擬態語で表現し分けるものを動詞の語彙の違いによって表し分けるということがしばしば指摘されるが、その傾向は本研究においても確かめられた。さらに、英語における擬音・擬態語の使用には、音や様態などを表す語として用いられるよりも、それを動詞や名詞等に派生させた語彙が用いられるのが主流であるという筈（2008）の主張も確認された。

しかし、英語原版で用いられた擬音・擬態語の起源の大半は（13表現中9表現）動詞が起源であることが分かった。もし、この傾向が英語の擬音・擬態語全体について言えることであるならば、動詞の形で用いられた擬音・擬態語を、「擬音・擬態語の派生語」とし

て分類した筈(2008)に基づく本研究における分類方法が適切ではなかったことになる。それだけにとどまらず、本研究だけに限らず擬音・擬態語に関する日英対照研究の方法全体に方向転換を要請するものとなるだろう。今回明らかになった英語の擬音・擬態語の起源の問題については、引き続き調査を続けたい。

最後に、英語と日本語に見られる擬音・擬態語の起源の違いに見られる対比は、池上(1981)が英語を「する」的言語、日本語を「なる」的言語と類型化したことを彷彿させる。「する」的言語は動作主を際立たせようとし、「なる」的言語はそうではない言語である。池上は、移動を表す表現に注目し、英語では<変化するもの>の個体の<場所の変化>を述べるのに対し、日本語では、その個体を含んだ全体の<状態の変化>を述べるという。そして、「する」的言語は個体中心的な捉え方、「なる」的言語は全体中心的な捉え方をすると述べる。この考え方は、ここでの擬音・擬態語の担う役割の違いを説明するのにも適用できるように思われる。「する」的言語である英語は、音が鳴っている状況において、音を出す個体に注目し、その個体の変化をもたらしたと捉えるため、動詞としての使用が擬音・擬態語の始まりとなりやすい。それに対して、「なる」的言語である日本語は、同じように何か音がなっている状況において、音を出す個体を含め、音が鳴っているという状況全体に注目し、その音そのものを表す表現に、引用の「と」や様態を表す「に」をつけて副詞として表現するという使用が常に中心的となっている。このように考えると、擬音・擬態語の有り様にも、日本語と英語の世界の捉え方の違いが映し出されているということができよう。この点も今後の課題としたい。

注

- 1 「みしみし」(p.136「古い建物の廊下などを歩くときの音・響きの擬音語・擬態語」)、「さわさわ」「ざわざわ」「さらさら」(p.137「木の葉が触れ合って出る音・響きの擬音語・擬態語」)、「ぎしっ」(p.137「戸を開けたとき、金で出る音・響きの擬音語・擬態語」)、「きゅっきゅ」(p.137「靴の皮などがきしんで鳴る音・響きの擬音語・擬態語」)、「がちゃん」「かーん」「がちゃがちゃ」「かんかん」(p.138「金属製の物が落ちる。また互いに触れ合う音・響きの擬音語・擬態語」)、「こちこち」「ごつごつ」「ごつり」「こつん」「がんから」「かんかち」「がちゃり」「からり」「がらんがらん」(p.138「固い物が触れ合う音・響きの擬音語・擬態語」)、「がじゃがじゃ」「かちゃ」「かちゃり」「かちゃかた」(p.138「固くて細いものが触れる音・響きの擬音語・擬態語」)、「からから」「がらがら」(p.138「固い物・乾いた物が触れる音・響きの擬音語・擬態語」)、「きちきち」「きしきし」(p.138「固くて小さい物が詰まってきしむ

音・響きの擬音語・擬態語)、「ぎしぎし」(p.138「固くて小さい物が触れ合う音・響きの擬音語・擬態語)、「さらさら」(p.139「軽い物が互いに触れる音・響きの擬音語・擬態語)、「ことごと」「さやさや」「ぎちぎち」(p.139「物と物とが触れて鳴る音・響きの擬音語・擬態語)、「がたがた」「かちかち」「がちがち」「がりがり」(p.139「激しく物が触れる音・響きの擬音語・擬態語)、「かしゃかしゃ」「がさ」(p.139「乾いた物が互いに触れる音・響きの擬音語・擬態語)、「がさがさ」「ことごと」「ごとごと」「ほこほこ」(p.139「器の中が小さいために触れ合う音・響きの擬音語・擬態語)、「ごしごし」「ごりごり」「きゅっきゅっ」(p.139「力を入れてこする音・響きの擬音語・擬態語)、「すぽん」「ずぽん」(p.139「筒・穴など細いところに物を出し入れしたとき出る音・響きの擬音語・擬態語)、「すとん」(p.139「抵抗なく落ちる音・響きの擬音語・擬態語)、「みしみし」(p.139「物を動かしたり取りこわしたりする音・響きの擬音語・擬態語)、「かしゃっ」(p.139「カメラのシャッターなどが下りる音・響きの擬音語・擬態語)、「ぱちぱち」「かしゃかしゃ」(p.139「カメラのシャッターが連続で下りる音・響きの擬音語・擬態語)、「きりり」「ぎりり」「ぎりぎり」(p.140「油が切れたなどの原因で滑らかに動かないで回る物の音・響きの擬音語・擬態語)

- 2 「ぴちゃぴちゃ」「ぴちぴち」「ちゃぶちゃぶ」「びちゃびちゃ」「びしゃびしゃ」(p.561「水が跳ねる」「水がしきりに跳ね返る」の擬音語・擬態語)、「どぼん」「どぶん」「ざぶ」「ざぶり」「ざぶり」「ざんぶ」「ざんぶり」「どんぶり」(p.135「水中に物などを投げ入れたときの音・響きの擬音語・擬態語)、「びしゃっ」「びしゃびしゃ」(p.136「水が勢いよく打ち当たるときの音・響きの擬音語・擬態語)、「ぱちぱち」(p.136「火などがはじけるときの音・響きの擬音語・擬態語)
- 3 「みしみし」creak、「さわさわ」項目なし、「ざわざわ」rustle、「さらさら」brush、「ぎしっ」項目なし、「きゅっきゅ」squeak、「がちちゃん」項目なし、「かーん」ring、「がちがち」rattle, bang, jangle, clink, 「かんかん」ring, clang, 「こちこち」clunk, 「ごつごつ」bang, thump, 「ごつり」項目なし, 「こつん」項目なし, 「がんから」項目なし, 「かんかち」項目なし, 「がちやり」項目なし, 「からり」clatter, 「がらんがらん」項目なし, 「がじゃがじゃ」項目なし, 「かちゃ」項目なし, 「かちゃり」項目なし, 「かちゃかた」項目なし, 「からから」clatter, 「がらがら」rattle, 「きちきち」該当する使用法なし, 「きしきし」項目なし, 「ぎしぎし」creak, 「ことごと」rattle, 「さやさや」rustle, 「ぎちぎち」項目なし, 「がたがた」rattle, clatter, 「かちかち」clap, click, 「がちがち」chatter, chip, 「がりがり」scratch, scrape, crush, 「がさがさ」rustle, 「ことごと」該当する使用法なし, 「ごとごと」rattle, 「ほこほこ」該当する

使用法なし、「かしゃかしゃ」項目なし、「がさ」項目なし、「ごしごし」scrub, rub、「ごりごり」scrub, grind, whittle、「きゅっきゅっ」squeak、「すぼん」項目なし、「ずぼん」項目なし、「すとん」drop, fall、「かしゃっ」click、「ぱちぱち」click、「かしゃかしゃ」項目なし、「きりり」項目なし、「ぎりり」項目なし、「ぎりぎり」grate 以上28語(延べ42語)

- 4 「びちゃびちゃ」lap, pat、「びちびち」該当する使用法なし、「ちゃぷちゃぷ」項目なし、「びちゃびちゃ」slap, splash、「びしゃびしゃ」項目なし、「どぼん」splash、「どぶん」plunge、「ざぶ」項目なし、「ざぶり」項目なし、「ざぶり」項目なし、「ざんぶ」項目なし、「ざんぶり」splash、「どんぶり」項目なし、「びしゃっ」splash、「びしゃびしゃ」splash、「ぱちぱち」glitter 以上6語(延べ10語)
- 5 『広辞苑』では「擬音語の丁+と」ではないかと述べられている。
- 6 「駆け上がる」「押し上げる」「見渡す」のように二つの動詞が結合したものを指す。
- 7 この項目に該当する「crack, scratch, squeeze」は、擬音語・擬態語を起源とはしないが、「擬音・擬態語としての意味や用例が『マンガで楽しむ英語擬音語辞典』に記載されているもの」(p.7)という基準に該当するため、現在の使用においては擬音・擬態語としての用法が確立しているものみなし、擬音・擬態語として分類している。なお表4において、crack, scratchは擬音語派生語、squeezeは擬態語派生語として分類しているが、これは筧(2008)の分類に依拠するもので、音や様態を表す語を名詞化や動詞化させた派生語としての分類である。つまり、当該の語が、音や様態そのものを直接表現するために用いられているのか、名詞化や動詞化されたものが用いられているのかを区別しており、語源の問題とは別の問題である。
- 8 現在はscutterは「急いで走る音」という名詞の意味を持っており(『ODE』)、起源は不詳ではあるが擬音語として分類した。

引用文献

- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店。
- 筧壽雄(2008)「英語の擬音語・擬態語—主として日本語との対比において」『日本語学』特集テーマ別ファイル意味論4』pp. 36-43、明治書院。(『日本語学』(明治書院)1986年7月号通巻45号Vol.5-7に掲載)
- 筧壽雄・田守育啓(2011、1993)「序にかえて」『オノマトピア』筧壽雄・田守育啓編 pp. i-vii、勁草書房。

小島義郎 (1984) 『英語辞書学入門』三省堂.

スコウラップ、ローレンス (2011、1993) 「日本語の書きことば・話しことばにおけるオノマトペの分布について」『オノマトピア』 笈壽雄・田守育啓編 pp. 77-100、勁草書房.

鈴木雅子 (2014) 「解説—歴史的変遷とその広がり」『日本語オノマトペ辞典』 pp. 577-648、小学館.

田守育啓 (2011、1993) 「日本語オノマトペの統語範疇」『オノマトピア』 笈壽雄・田守育啓編 pp. 17-75、勁草書房.

松田徳一郎 (2007) 「解説：擬音語の特徴」『マンガで楽しむ英語擬音語辞典』（新装コンパクト版）『リーダーズ英和辞典』編集部 pp. 225-229、研究社.

村田忠男 (2011、1993) 「日英語の AB 型オノマトペ・重複形・等位接続構造表現の関係」『オノマトピア』 笈壽雄・田守育啓編 pp. 101-125、勁草書房.

山口仲美 (2012、2002) 『犬は「びよ」と鳴いていた』 光文社新書.

引用辞書

『ジーニアス英和辞典』（大修館書店、2001-2008）.

『新英和大辞典 第6版』（研究社、2002、2008）.

『日英擬音・擬態語活用辞典』（尾野秀一編著、北星堂書店、1984）.

『日本語オノマトペ辞典』（小野正弘編、小学館、2014、2007）.

『日本語使いさばき辞典』（現代言語研究会著、あすとろ出版、2013）.

『マンガで楽しむ英語擬音語辞典』（新装コンパクト版）（『リーダーズ英和辞典』編集部編、研究社、2007）.

Oxford Dictionary of English (Second Edition revised, Oxford University Press, 2005).

観察対象文献

『英語で楽しむピーターラビットの世界』（英文・絵 Beatrix Potter、訳・解説木谷朋子、監修河野芳英、The Japan Times、2012）.